



人間の罠

曾野綾子

サンケイ新聞社

人間の罠わな

曾野綾子そのあやこ

昭和47年12月22日 1刷

昭和48年1月30日 6刷

定価七八〇円

発行者 小野田 政

編集者 塩田 廣 八

印刷 株式会社堀内印刷所

製本 田中製本印刷株式会社

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・千代田区神田錦町三の

一五梅屋ビル(101)

大阪・北区梅田町二七(530)

乱丁・落丁本はおとりかえします

長編小説

人間の畏

目次

おにぎりころころ	5
情報過多	25
伝言	43
初対面	55
痛まぬ足	88
階級闘争	107
現世	124
らっきょうの皮	138
二匹の蛇	159
答	178

人間の罠	業苦	月の香	もう一つの世界	波音	日向の猫	夜半の風	朝顔	雨蕭蕭	聖域	夜の顔	白い嘘
423	398	379	367	348	333	308	289	272	245	219	200

おにぎりころころ

突然、おむすびが、土手の上から降って来たのである。

降って来たというか転がって来たというか、白いボールのようなものは、鼎雪子の足許を、草につつかえながら、着実に落ちて来た。雪子の連れていたダックス・フントのロンが、それに跳びつこうとして、綱を思い切り引った。

それが川原でなかったら、雪子はその白い落下物を、黙って見送ったことだろう。しかし今、雪子の眼に入る限りのこの川原の光景の中では、いい年の大人も、子供も、皆があらゆる空間を利用して、野球や、ドッジボールや、テニスなどをして、つまりは球を追いかけていたのである。

雪子は、ロンに球をとられまいとして、その引き綱を引いておいてから、自分が素早い身のこなしで、ボールを捕えた。その瞬間、ボールが柔く、しかもまだ温か味の残ったおにぎりであることを発見して、雪子は当惑したのである。

「やあ、済みません」

雪子は声のした方を見た。青いアノラックを着た青年

が、斜面の途中に立っていた。

おにぎりは、透明なラップに包んである。まるで斜面を転がり落ちる運命を予測したようなおにぎりは、数米の旅をしてもまだ充分に食べられるし、それだからこそ、落とし主はのんきに声をかけたのだろう、と思う。「たすかりました」

青年は、バネのよくきいた足どりで、冬の陽ざしを掃らすように、駆け下りて来る。改めて彼の方を見上げて、彼が初めて、絵を描いていたのだということを雪子は知った。

「平らな所へ下りて来てから、弁当を開けばよかったんですが、弁当を開きながら坂を下りようとしたのがいけなかったんです」

青年は言いながら笑った。見知らぬ人間から声をかけられた時の、不安やけうとさがなかった。相手が八方破れに見えるからかも知れない。

「絵をお描きになるんですか？」

「実に下手な絵ですが……絵描きじゃないんです。僕は無職ですから」

雪子は青年と連れ立って、土手を上った。

途中に画板とスケッチブックが投げ出すように散らかっている。上流の橋や、アパート群や、高压電線が描かれているが、遠近法がしっかりしていないので、川も道も盛り上がり蛇のようにのたくなっている。その上に描かれたボートやバスは今にも画面から滑り落ちそうだった。

た。

「よかったら、あなたも、にぎり飯食べませんか。勿論、きれいな方の奴です」

紫色の風呂敷の中に果物の絵の印刷された袋があり、その中に、この手のラップで包んだおにぎりが、五、六個も入っているらしい。

「女房は田舎の女でしてね。にぎり飯を作るとなると、一度にたくさん作るんです。一つ二つじゃ感じが出ないらしいですね。僕が、いつも手を汚しているので、一つずつ包んであるんですが」

「頂きますわ」

「口に合わなかったら、無理して食べんであなたの犬にでもやって下さい。いや、おたくの犬のような高級なのは、梅干入りのにぎり飯なんか食わないですか」

青年の言う通りであった。犬とはいえロンは美食をさせつけているから、彼の昼食用のにぎり飯など喜ばないであろう。

青年はスケッチブックから画用紙を一枚破り取った。

「どうぞ、この上に坐って下さい」

最大のもてなしのつもりらしい。早く坐らないと、紙が川風で飛んでしまうので、雪子は笑いながら、その上に腰を下ろした。

「この辺によく絵を描きにいらっしゃるんですか」

青年のすすめてくれるにぎり飯を受けとりながら雪子は尋ねた。彼を見かけた記憶はなかったような気がした

からだった。

「別に絵を描くのが好きでもないんですけどね、家についても女房がいろいろと文句を言うし煩いもんだから、こういう暖かい日には逃げ出して来る訳ですよ。寒い日は行き所がなかったですねえ。家の中で膝をかかえて女房の愚痴を聞いているんです」

別に彼自身、現状にさして不満な訳でもないらしい。まだせいせい二十五、六歳にしか見えないが、妻帯者だと知って雪子は却って気安を感じた。

「あなたは、何んですか、真っ昼間から犬なぞ連れて、やっぱりヒマ人ですね」

自分のことを棚に上げたように言う。

「学生と言えば、学生なんですけど、大学院へ行つてますの」

「大学院ね。学問が好きなんだな」

「いいえ。あなたと同じです、ヒマつぶし」

まだ人生の目的も決まらないので、とはキザで言えなかった。

「親がお金持なんだろうな」

「どうでしょう」

初対面なのに、会話が深く沈み過ぎる、と思ったが、その過程が信じられぬほど自然だった。

「その犬は何ですか、やっぱり舌嚙みそうな横文字の名前ついてるんですか」

「いいえ、簡単なんですのよ。ロンというんですの、二

匹生まれてね。一匹がロンで、もう一匹がパリですの。
二匹とも雄でしたから」

「ふうん。パリはどこにいるんですか」

「車に轢かれました」

「ふうん、深窓に育ち過ぎてたんだ、きっと」

「あなたこそ、深窓のお育ちでしょう。就職もなさらず絵をお描きになったりして、どうして生きていらっしゃれるのか謎みたい」

「僕は、ほんの先月、日本へ帰って来たんです」

「パリにいらっしゃいましたの？」

「いや、平和部隊に加わって北印度の実験農場に入ってたんです」

「まあ、奥さまを置いて？」

「女房は教員なんです。僕は我儘を通していいっていうことになってたものですからね。二、三年は帰らないつもりで、さっさと印度へかけてしまっただけです」

「印度の生活がお合いにならなかったんですか？」

「いや、いろいろ興ざめな点はあったんですがね、合うことは合ってたんです。ところが驚いたことに、女房が妊娠してた訳ですよ。まあ結婚しているのに、子供が生まれる時にも家にいなかったっていうんじゃ、後々まで祟られそうな気がしてね、お産に間に合うように、先月帰って来たんです」

雪子は、青年のにぎり飯の掴み方をじっと観察していた。この青年は、教員の女房に事実上養われており、妻

から、まともな就職もしてないことを、時々ぐちられていうというのが、そのにぎり飯の掴み方だけに男らしくてみごとなものがある。

こういう透明なラップに包まれている場合は別として、雪子がおにぎりを手にする時は、指先の汚れる面積をできるだけ少くしようとして、三本の指先で、やつとおにぎりを支えるような恰好になってしまふ。しかしこの青年はそうではない。彼はまず包み紙を剥ぎ、大きな掌の全面で、がっしりと輝くような飯粒の塊を握っている。雪子はそのこと自体に何の意味があるかわからなかったが、ともかく、そのような男の手を美しいと思つて見つめた。

「お子さんがおできにならなければ、平和部隊にずっと入っていらしてもよかったとお思ひになりますか？」

「悪いことはないですね。ただし、僕は農村の出じゃありませんからね。学生時代、頭が悪い分だけ体は鍛えましたが、やっぱり農業に関しては、農村出の連中に、あらゆる面で、一日どころか百日の長がある訳ですよ。

そういう面で、これは自分にあまり適していない仕事かな、と思った時もあったけど——そうですね。一般論として言えば、今、日本人が海外へ出かけて行くには、とにかく、何か一つ特殊技術がなきゃダメですね。平和部隊をやめることについて、僕なりの納得がいったのは、帰りに、アグラという町で、聖ゴンサレス病院という癩病院を見た時なんです。これは日本人のカトリックの神

父さんがやっているんだけれど」

「知っています」

雪子は眩くように言った。

「スタッフは、医者も看護婦も全部日本人でね。発足して三年目だそうですが、実に立派な仕事をやっている」

「そこを——見ていらっしやいましたの？」

「ええ、知り合いの人に紹介して貰いましたね、三日間も泊めて貰って、彼らの仕事ぶりを見て来ました」

「如何でございました？」

「いや、もう頭が下がりました。何と言ったって汚い病人たちですよ。汚くても、金でも儲ければ人間まだしも我慢しやすいでしょうがね。いくら患者を見たって、病院は一文も取らないんですから。全く損得勘定抜きで言葉があるけど、損にも得にも、あれじゃ、初めっから、こちらが損に決まっているんだから。全く世の中には偉い人がいると思つたですわ」

「そうでしょうか」

青年は、相手の返事に耳を疑つた。

「偉くは、ないかな？　そういう病人を見るのが……」

雪子の頬から耳にかけて、微かな血の色がのぼった。

「もちろん、偉い方もいらっしやるとは思いますが……」

でもたとえ、日本にいても適当な仕事の口がなかったり、周囲とうまく折り合わなかったりして、印度での勤め口をやつと見つけたという方だつてあるかも知れませんがね。そして向こうへ行つても、お酒ばかり飲んで

いて、あまり研究も何もしなかったら……そういう人だつて慈善病院に転がり込んでゐるかも知れませんか」

「あなたは、おもしろい人だな」

青年は雪子に言った。

「確かに、あなたが言われた通り、聖ゴンサレス病院にも一人、あれは吉備さんという大酒飲み先生がいましたがね。アル中かどうか知りませんが。しかし僕の見るところ、ああいう土地で仕事してて、酒でも飲まなかったら、どうなります。普通の人間には耐えられませんか。僕たちもよく酒を飲んだ。殺氣立つて来ることもあるんですよ。仕事がきつくなったりすると……。そういう時は、素早く酒を飲むんです。なまじつか素面で解決しようなんて思つてると、傷が深くなりますからね。あなたは、何か、あの病院についてご存じですか」

「いいえ」

「若い方の、友利先生というのも偉かったですよ。結婚して二年目くらい、まだ若い奥さんを連れて来てましたがね。奥さんというのは、あなたぐらいじゃないかな。その奥さんが、主人を信じてまいりましたって言われた時には、僕は奥さんの背中から後光がさしているように思いましたよ。」

友利夫妻の最大の財産は、オルガンなんです。何でも印度の赴任が決まってから、二人して大急ぎでオルガンを習ったんだそうです。言葉が通じない所で、人間の和をはかるのは音楽が一番だつて言つてね。オルガンは

お餞別をくれるという友達の金を集めて買ってもらって、それを持って行っただけです。ところが、そのオルガンを、印度の税関が、何のかんと言つて、三月も通関させなかった。

友利先生は、オルガンがもう使えなくなるのではないかと思つて、随分やきもきしたそうですがね。幸いにも、まだちゃんと鳴るうちに手に入つて、夫妻は日曜毎に、入院患者の子供たちに、日本の童謡なんかを教えてましたよ。実に柔和な人たちでね。殺氣立つたところは全くないんだな」

「その方はお酒を上がりませんか?」

「少しぐらいは飲むでしょうがね。汁粉を煮る話をしてたから甘党じゃないかな。ああ、そうだ、奥さんと二人でビール一本を晩酌に飲んで、ほろ酔いになる話をしてた。あちらは日本よりビールが高いんですよ。酒が強かつたらお金がかつて大変だろうって言つてました。何しろ、日本よりはずっと薄給だそうですから。しかし、カトリックも悪いね」

青年は突然そう言つて笑つた。

「どうしてですか?」

「友利先生はクリスチャンらしいけど、吉備先生は違ふんだ。それを、ここは奉仕の病院ですから、安月給で平然とひとをこき使つてゐるんだからね。まあ、神父さん自身も無給で働くんだから、文句を言えた義理じゃないけど……でも僕は言つてやつたんですよ。」

《神父さん、ここは平和部隊じゃないんだから、もう少し考えた方がいいですよ》つてね」

「お考えになることはないと思いますわ。そういう所で働くのは、好きで行く人たちですもの。日本にいれば、もっとお金稼げるのにみすみす、それをしないで印度へ行く訳ですから」

「あなたは、美談が嫌いらしいですね。もっとも美談を拒否するというのは、現代でも常に一種の勇氣が必要とはされるけれど」

青年は微笑つた。

青年が四個のにぎり飯を食べ終わる頃には、訓練のよく行き届いている笹のロンもじつとしてゐることに飽きたとみえて、しきりに尻尾で、土手の草を叩き始めた。

「失敬しました。自己紹介するの忘れしました」

青年は、にぎり飯の入つていた紙袋で、しきりに掌のねばねばをこすりながら悪気のない笑顔を見せた。

「僕、美濃口と言います。美濃の国のミノに口です。美濃口章男です。あなたの名前を無理に伺おうという訳じゃありませんが」

「私は、さっきちょっと嘘を言いましたわ」

雪子は青年の顔を見つめながら言つた。

「へえ。そいつは、楽しいや」

雪子は笑い出しそうになつた。

「聖ゴンサレス病院について何も知らないと申しましたけど、少し正確ではございませんでした」

「成程」

「知らないと言え、勿論、行ったこともありませんし、知らない筈なのですけど、でもそうは言えないところがあるんです。私の父が、財団法人・聖ゴンサレス病院の常任理事の一人なんです。父は、鼎親徳と申します。私は鼎雪子です」

「そりゃ、まあ、何とご挨拶していいかわかりませんけど、世間は實際狭いもんですな。それで理事っていうと、あなたのお父さんも、カトリックの神父さんですか」

「いいえ、カトリックの神父さんは妻帯なさいませんわ」

雪子は笑いながら言った。

「表向きでしょう。それは」

「いいえ、表も裏も。ただ、父は信者代表の一人だと思います。聖ゴンサレス病院のお金集めをやっているのは、殆ど信者はかりですから。勿論、外部から、医学的な面で加わって下さっている学者もいらっしゃるし、財界や日印協会のメンバーもいらっしゃると思いますけれど……」

「お父さんの、お仕事は何なんです」

「銀行屋でございます」

「じゃあ、金集めは簡単だ。銀行の金庫からちよいと持つてくりゃいい」とふざけるのを、

「本当。その方がよそから集めるより、ずっと簡単ですものね」と雪子も笑った。

「いろいろと気にさわることを言ったかも知れませんが」

美濃口はちょっと考えてから、

「いや言っていないよ。言わなかったですよ。むしろ先生たちのことは褒めたんだよな。そうだ。薄給はいかんてことだけ言ったな。そりゃ、本当のことだもん」

「父にそう申しておきます。外部からの貴重な御意見として」

「本当に貴重ですよ。僕は実際に行って見て来たんだから。恐らくあの病院の関係者だって——日本側の話ですけどね、理事や評議員なんて人達で、実際にあそこへ行ってみて来た人は少いでしょ。偉い人に限って現場は知らないものなんだ」

「本当に、父もまだ、印度へは行ったことはないと思います」

「一度行って見ていらっしゃって、言っして下さいよ」

「父が参れなければ、私が参ります」

雪子はきっぱりと言った。

《じゃあまた、僕が絵描いてるとこ見つけたら声をかけて下さい。赤ん坊生まれで、外へ連れ出せるようになつたら、陽なたぼっこにぶら下げて来ますから》

というノンキな美濃口青年の言葉の余韻が犬のロンを連れて歩き出しても、暫くの間、雪子の耳許に残っていた。どういう具合にうまいこと、妻との間で話がついて

いるのか、子供が生まれるというのに、やはり就職する気もないらしい。

ロンは、ちよろちよろと短い脚で小股に走ろうとする。川に面した住宅地の坂をのぼりかけてから、雪子は初めて美濃口青年の記憶を心から追い払った。考えなければならぬことが一ぱいあるような気がする。それも、わりと重大なことが……。

雪子は傾斜地の途中のバラ垣の門をくぐった。少女漫画によると、バラ垣のある洋館はブルジョアの家庭という事になっている。

ブルジョアの家庭かどうかは別として、バラ垣は母の趣味であった。もっとも、母は花だけ栽培しているのではない。最近では、野菜が高くなったからと言って、庭の一部でひそかに二十日大根や夏になると、茄子や胡瓜などを作っている。

家は数年前に建てかえた、当節はやりのプレハブ住宅である。とは言ってもアメリカの技術を入れたプレハブだから、小さいなりに、冷暖房完備である。アメリカの中流の中ぐらいの家だと父が話をしていたことがあった。

「お母さま！」

ロンを囲いの中に入れて、庭から上がるのに、急いでいたので、サンダルが、一つ宙をとんだ。振り返ると片足はテラスの上に、もう一方は芝生の上に吹っこんでいる。ロンはとんだサンダルに興奮して、きんきんかん

えたてた。

雪子はその脱ぎっぷりを確認しただけで家の中に入った。

「お母さま！」

母はリネン・ルームでアイロンをかけている。もう四十五だが、細いので、後姿は娘のように見えた。

「ちょっと、相談があるの？」

「なあに」

「私、旅行の行先を換えていいかしら」

三月に雪子は初めてのヨーロッパ旅行に出して貰うことになっていた。

「どうしたの？ 今になって急に」

「ううん、そうじゃないの。同じお金出して下さるなら、私、別の所へ行きたくないの」

「だってお父さまは、あの旅行だからお許しになったのよ」

ヨーロッパ行きは、一種の団体旅行なのだが、旅行会社で公募されているという訳ではない。財界の、お互いに最低限、名前ぐらいはよく知り合った人々の範囲でその未婚の娘と息子ばかり、十六人ずつ集めて、計三十二人のグループを作って行くのである。費用は少し高いが、若い者同士で見聞を拓けるという意味もあるし、それに、そのようにして選ばれた若者たちなら、旅行の間で、どのような組み合わせのロマンスが誕生しても、それは、その儘、親たちの思う壺でもある訳なので

ある。

「あの旅行がいやで、どこへ行きたいのよ」

「印度よ」

雪子は答えた。

母の周子は、ブラウスをきちんと畳み上げてから穩やかに顔を上げて雪子に尋ねた。

「印度のどこへ行きたいの？」

「アグラよ」

「アグラは、もう少し後でいらっしやい。美術史か、建築の方とでも、またチャンスがあるでしよう」

アグラは十六世紀にロディ王朝を倒したババルによって受けつがれた古都である。アクバル帝がここに城を築き始めたのは一五六五年であった。その孫に当るシャール・ジャハーンが、愛妃のために、タジ・マハールという壮大な大理石の靈廟を作ったのである。

「もし地上に天国ありとするならば、それはこの地に他ならない」とその外壁にはペルシャ語で書かれているという。

「タジ・マハールじゃないの。聖ゴンサレス（病院）へ行くのよ」

雪子は母の顔を見た。

「聖ゴンサレスへ何しに行くの？」

「もちろん吉備先生に会いに行くのよ」

母は洗濯物を膝の上に置いたまま、幾分改まった語調で言った。

「吉備さんのことについては、ふれない、という約束でしょう」

「でもね、吉備さんのことを承知であそこに採用したのはお父さまでもあるのよ」

「お父さまは私情をまじえてはいけないとお思いになったのよ。それだけに、お父さまに対して、そのことについてはふれないのが、礼儀でしょう」

「お母さまは、私が吉備さんに会うのはいや？」

「もう、あなたも子供じゃないから、いけないとかいいとか言うことじゃないと思うの。お父さまも私も、そのことを少しも隠しては来なかったんだし。だけど、世の中には、極く自然に、言わなくてもいいこともあるし、ふれなくてもいいこともある、そういうものからは遠ざかっていなければいけませんよ」

「それはわかってるわ。でもね、私は今さらヨーロッパへ行って、ルーブルやロンドン橋なんか見て来ても始まらないと思ったの。私はお母さまの生き方を見て来た。とすれば本当の父親の生き方も見たいと思うの。お父さまも、それをお許しになると思うわ」

ずっと昔、まだ小学校の二年か三年の頃、雪子は或る日、秘かに詩の如きものを書いたのであった。

《私のほんとうのお父さんは、

おいしゃで、今日も、

かんじゃをみていると思う。

そんなにひとを見るひまがあるなら

自分の子をみたらいいじゃないの。

お父さん！

雪子は今、高い熱を出してゐるのよ」

「お父さん」というのは、吉備貢という男で、終戦後間もなく、母の周子に女の子を生ませたまま立ち去った医学生である。そして「お父さま」と区別されて呼ばれていたのが、吉備がいなくなつたすぐ後で周子が雪子と連れ再婚した鼎親徳である。

周子が鼎に会つた時、鼎も、七歳の息子を手許に残されて妻に先立たれた鰥夫であつた。二人はいわば、一人ずつの子供を連れて持ち寄り結婚したのである。

「お父さまは、印度だけはお許しになるとは思わないわ」
「でも、言ってみるだけ言ってみて」

雪子は母親に甘えるように言つた。

「お願いしてみたいんなら、あなたの口からお言いなさい」

母は突き放したように言つた。

「今日、お父さまお帰り遅い？」

「久我さんのお通夜だから遅くなると思うわよ。形式のお通夜じゃなくて、最後まで様子をみてあげて、明日のお葬式のうち合わせもしなければならぬって言つてらしたから」

久我というのは、鼎の同僚で昨夕妻を脳溢血で失つたのである。

「じゃあ、明日、教会に行く時にでも言ってみる」

明日は幸いにも日曜日であつた。

日曜の朝、教会に行く鼎一家を見て、誰が、その家庭の複雑な内情を想像し得るだろう。きちんと背広を着た鼎親徳が大いなる綱を握っている。鼎はピーナツ豆型の顔をした穏やかな背の高い紳士であつた。六十歳だが、年相応の白髪が、陽に輝いている。なまぬくの父と娘だが、雪子と鼎は実の親子のように似ている。他人がそういうと鼎は少しも騒がず、

「そうでしょう。家内とよりは私の方に似ていると思ひますな」

と何の無理もなく答えるのである。鼎の息子の昭徳は製紙会社勤めているが、結婚して、富士市に住んでるので、鼎一家は、一人娘を中心に、穏やかに「何不由なく」暮らしているように見える。強いて言えば、鼎夫妻は、一般の夫婦よりも、多少年が離れているが、鼎夫人・周子の小柄なきびきびした若々しさを見ると、鼎親徳が、年の離れた夫人にぞっこん熱を上げ、夫人の方も、分別のある年上の男に惹かれて結婚した経緯も手にとる様にわかるような気がして、自然に納得してしまうのかも知れなかつた。

翌朝、雪子が眼を覚ましたのは、朝八時少し過ぎであつた。

この分では、近くのフランシスカンの修道院で行なわれる九時から始まるミサに出席することになる。

顔を洗っていると、母が通りがかりに、

「私はもう、七時の（ミサ）に行つて来てしまったの」と言つた。

「そう」

「今日はね。クラス会があるでしょう。その前に美容院へも行かなきゃならないから。お父さまが、雪子と行くつもりで待つていらつしやるわよ」

「へえ」

ふと、母親の謀略ではないかと思つた。母は、雪子が鼎に印度行きのお話を持ち出す時に傍にいたくないのに決まつている。

父はでがけに自分でブラシを出して靴の埃をちよこちよこ払い、それから大小屋の方にロンを連れ出しに行つた。ロンが喜んで、ひいひい啼いてゐる声が聞える。

「お父さま、お父さま」

と、まだ多少ひんやりとしている朝風の中を、子供のやうに鼎を呼んでから、雪子は黒っぽい厚手の服を着た父とバラ垣の門のところまで一緒にゐた。そして川べりの道まで出てから、

「ねえ、お父さま、雪子お願いあるんですけど」

と甘い声を出した。

「私、今度のヨーロッパ旅行の代りに印度へ行きたいんです」

「ほう」

鼎は少しも驚かない。柔かな白髪が弱々しい春の日を投げ返しながらこちらを向いた。

「印度へ何しに行くの？」

「お父さまが、いろいろ働いていらつしやるでしょう。だから聖ゴンサレス病院へ行つて、できたら、ポロンテイヤーみたいに暫く働いてみたいと思うの」

「ほう。しかしどうして急に、印度を見たくなつたんだね？」

「昨日ね、川原で、おかしな絵描きさんに会つたのよ。

その人、偶然、聖ゴンサレス病院を見学して来て、本當にお腹の底から感動したんですつて、皆とてもよくやつてゐるつて……」

「外側から見ると、誰にもそう見えるもんだ」

「そうね。その人、お医者さまに払う月給が安すぎるのだけがいけない、つて言つてたわ」

「日本でとかく風評があつて、仕事のしにくい人たちが集まらなかつたんだ。技術的にはいいのだから、性格がどうも協調性がなくてね。以前の職場で問題のあつたやうな人たちがばかりだ。だから、一般論としては安いかも知れないが、当人たちは、それを自覚してゐるんじゃないか？」

「私もそういう意味のことをちよつと言つたのよ。そうしたら向こうは、あんな立派な仕事を評価しないのは、どうかしてゐるつていうやうな顔をしたわ」

「お父さんは、はっきり言うが、雪子が印度へ行くのは反対だ」

雪子は特に驚かなかつた。そんな予感が、もうとつく